

第4回「明日の象徴」受賞者を発表

～ 医療、保健、ライフサイエンスの分野で活躍している期待の精鋭6名を選出 ～

公益社団法人全日本病院協会(会長:西澤 寛俊)、一般社団法人日本病院会(会長:堺 常雄)、イーライリリー・アンド・カンパニー(NYSE:LLY、本社:米インディアナ州インディアナポリス、会長、社長兼最高経営責任者:ジョン・C・レックライター)は2015年11月10日(火)、東京プリンスホテルにて第4回「明日の象徴」の授賞式を執り行いました。「明日の象徴」は、医療、保健、ライフサイエンスの分野で活躍している35歳以下の期待の精鋭の活動を表彰するもので、本年の受賞者は6名となりました。なお、本プログラムは2012年の設立以来、今回で第4回目の実施となります。



左から、宮城氏、菊地氏、小谷野氏、陰山氏、江本氏、井階氏

第4回「明日の象徴」受賞者(敬称略)

研究者部門	小谷野 史香(こやの ふみか) 公益財団法人東京都医学総合研究所 ユビキチンプロジェクト一般研究員
医師部門	井階 友貴(いかい ともき) 福井大学医学部地域プライマリケア講座 (高浜町国民健康保険和田診療所) 講師
社会政策部門	宮城 杏奈(みやぎ あんな) 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部 専門調査員
看護・保健部門 (国内)	江本 駿(えもと しゅん) 東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻家族看護学分野 東京大学リーディング大学院 GCLプログラム 博士課程1年
看護・保健部門 (国際)	菊地 陽(きくち よう) 特定非営利活動法人 地球のステージ プロジェクトマネージャー 保健師・助産師・看護師
NGO・ ボランティア部門	陰山 亮子(かげやま りょうこ) 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 ホンジュラス事業業務調整員

「明日の象徴」ならびに受賞者についての詳細は、別添資料をご参照ください。



別添資料

【明日の象徴について】

「明日の象徴」は医療、保健、ライフサイエンスの分野で活躍している 35 歳以下の期待の精鋭の活動を顕彰します。若い人々の活動に光を当てることで、若い世代全体にイノベーション追求の機運が広がること、またそれを奨励、促進する環境を醸成することが目的です。イノベーションを通じて国民の健康を促進し、健やかな日本の明日を築きます。また、やる気ある優秀な人材を育て、世界的な競争力を高め、産業の育成を目指します。

【顕彰部門】

- 研究者部門： 医学、ライフサイエンス分野における基礎、臨床、公衆衛生に従事する研究者
医師部門： 専門医、プライマリーケア、地域医療、公衆衛生に従事する医師を含む
社会政策部門： 医療経済、医療政策を含む社会政策分野における研究者
看護・保健部門： 看護職、助産婦、セラピストなどを含む
※今回は、国内・国際の各領域 1 名を選出しました
NGO・ボランティア部門： 自身の貴重な時間を使って無償で活動を展開し、医療、ヘルスケアの分野で新たな領域を開拓している個人
ヘルスケア基盤部門： 上記分野以外であらゆる医療、ヘルスケアに関連する業種の従事者。
例えば薬剤師、医療 IT、病院経営、インフォマティクス、医療機器、起業家など
※今回は該当者はおりません

【対象】 35 歳(2015 年 1 月 1 日現在)以下の方で、上記部門における活動が革新的で現状を飛躍的に改善するものであること、あるいはその可能性を秘めていること

【共催】 公益社団法人全日本病院協会、一般社団法人日本病院会、イーライリリー・アンド・カンパニー

【後援】 総務省、外務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、公益社団法人日本医師会、公益社団法人日本看護協会

【審査委員会（五十音順、敬称略）】

- 井村 裕夫 京都大学名誉教授、公益財団法人先端医療振興財団名誉理事長
大塚 義治 日本赤十字社副社長、元厚生労働事務次官
坂田 東一 一般財団法人日本宇宙フォーラム理事長、前ウクライナ大使、元文部科学事務次官
南野 知恵子 元参議院議員、元法務大臣
広中 和歌子 公益財団法人水と緑の惑星保全機構理事長、元参議院議員
藤井 宏昭 独立行政法人国際交流基金顧問、元駐英大使
間野 博行 東京大学大学院医学系研究科教授
道永 麻里 公益社団法人日本医師会常任理事
矢崎 義雄 国際医療福祉大学総長、独立行政法人国立病院機構名誉理事長、国立国際医療センター名誉総長



【諮問委員会（五十音順、敬称略）】

伊佐 進一	衆議院議員
大串 正樹	衆議院議員
大野 功統	日本国際協力財団名誉会長、元衆議院議員
大畠 章宏	衆議院議員
落合 慈之	東京医療保健大学学事顧問、NTT 東日本関東病院名誉院長
加藤 良三	三菱商事株式会社取締役
北村 俊昭	国際石油開発帝石株式会社代表取締役社長
木村 廣道	東京大学大学院薬学系研究科特任教授
桐野 高明	独立行政法人国立病院機構理事長
今野 良	自治医科大学附属さいたま医療センター教授
佐々木 伸彦	富士通株式会社顧問
佐野 忠克	ジョーンズ・デイ法律事務所弁護士
澤口 聡子	公益社団法人日本女医会理事、国立保健医療科学院総括研究官
柴生田 晴四	一般社団法人経済倶楽部理事長
菅原 一秀	衆議院議員
関 芳弘	衆議院議員
高木 美智代	衆議院議員
武見 敬三	参議院議員
竹本 直一	衆議院議員
豊田 真由子	衆議院議員
中川 正春	衆議院議員
久常 節子	元公益社団法人日本看護協会会長
藤田 伍一	東京福祉大学学長
細田 博之	衆議院議員
前原 誠司	衆議院議員
牧原 秀樹	衆議院議員
森 臨太郎	国立研究開発法人国立成育医療研究センター研究所政策科学研究部部長
山田 美樹	衆議院議員
山本 修三	株式会社日本病院共済会代表取締役
湯下 博之	民間外交推進協会専務理事

※審査委員/諮問委員は必ずしも所属先の代表として「明日の象徴」の委員を務める訳ではありません。



Symbols of Tomorrow

【受賞者プロフィール】

研究者部門： こ や の ふ み か **小谷野 史香** 公益財団法人東京都医学総合研究所 ユビキチンプロジェクト一般研究員

推薦者： 田中 啓二 公益財団法人東京都医学総合研究所所長



小谷野史香氏は、これまで一貫して「ミトコンドリア異常からパーキンソン病を理解する」ことをテーマとして研究を行ってきた。パーキンソン病は、運動障害以外にも鬱などの非運動症状を合併することが多く、進行に伴って日常生活が困難になることが知られている。超高齢化社会を迎えた今、パーキンソン病患者は増加の一途をたどっており、根本的な治療法の開発が強く望まれている。

パーキンソン病は、孤発性と遺伝性に大別されるが、なかでも遺伝性劣性パーキンソン病の原因遺伝子産物であるPINK1（蛋白質リン酸化酵素）とParkin（ユビキチン連結酵素）に注目して研究を進めてきた。これまでの研究を通じて、細胞内の主なエネルギー合成工場であるミトコンドリアが異常な状態になると、

(1)PINK1がユビキチンとParkinをリン酸化し、(2)リン酸化ユビキチンがリン酸化Parkinを活性化して、不良なミトコンドリアの選択的な排除を促進することを初めて明らかにした。PINK1存在下でParkinが活性化することは既に明らかになっていたが、具体的なParkinの活性化メカニズムは長らく解明されていなかったため、この研究は世界中から注目されている。さらに、翻訳後修飾因子として報告されてきたユビキチン自体が、翻訳後修飾（リン酸化）されるという新たな概念を打ち出し、持続性のある優れた成果を上げている。

上記の発見により、パーキンソン病発症の分子メカニズムが解明され、リン酸化ユビキチンがパーキンソン病の発症を抑えていることが強く示唆された。この発見は、パーキンソン病の新たな治療法開発に寄与することが考えられ、医療、福祉の分野において極めて有用な可能性を秘めているとともに、長寿社会に大きく貢献することが期待される。

北里大学理学部卒

慶應義塾大学大学院医学研究科修士課程修了

東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了

医師部門： い かい と も き **井階 友貴** 福井大学医学部地域プライマリケア講座
(高浜町国民健康保険和田診療所) 講師

推薦者： 田中 志子 医療法人大誠会理事長



井階友貴氏は、全国各地において医師不足が深刻化している中、医療機関・行政・住民が三位一体となって地域医療のシステム構築に向けて熱心な活動を続けてきた。2008年に福井県高浜町に赴任した当時には、人口に対する医師の数は全国平均に対して約半分までに落ち込んでいたという。医師不足と並んで、住民の地域医療に対する関心の低さが、危機的な状況に拍車をかけていた。

その状況を打開すべく取り組んだのは、町内の医療機関や福祉事業所を巻き込み医学教育、住民啓発を行い地域医療に対する意識改革を目指す活動だった。地域医療を担う家庭医や、病院総合医を研修できる教育機能が揃っている点に着目し、全国初の市町村単独医学部寄附講座である福井大学医学部「地域プライマリケア講座」に就任以来、診療と医学教育、住民啓発、研究を結びつける仕組みが

作られるようになり、今では全国から高浜町に年間130名を超える研修者が訪れるまでに成長を遂げ、人口対医師数も全国平均レベルに回復した。

また、住民有志団体「たかはま地域医療サポーターの会」を立ち上げ、地域医療に対して住民にもできる取り組みを提唱してきた。救急の際に受診するポイントを示した「救急受診フローチャート」の作成、配布をはじめ、医療の効果的な受け方を示したリーフレットやビデオの作製、また活動を知ってもらうための機関紙の発行など、住民に寄り添った医療づくりに熱心に取り組んできた。

住民主体の地域医療づくりを実現し、次世代の地域包括ケアシステム構築に著しく貢献した功績は大きく、今や地域医療再生のモデルケースとなっている。

滋賀医科大学医学部医学科卒



Symbols of Tomorrow

社会政策部門: ^{みやぎ あんな}宮城 杏奈 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部 専門調査員
推薦者: 飯田 圭哉 内閣官房健康・医療戦略室次長
 伊藤 直樹 独立行政法人国際協力機構理事
 岡本 喜代子 公益社団法人日本助産師会会長



宮城杏奈氏は、社会政策の立場から栄養分野についての研究を行ってきた。食糧・栄養の問題は保健医療の重要な課題であるとともに、安全保障の観点からも国際的に取り組むべき問題であるとして、途上国の貧困問題、特に飢餓を含む食糧問題の国際的な取り組みに貢献した。

大学在学中にタイの農村部にてフィールド調査を実施、途上国の状況から現地の栄養と健康に及ぼす影響を学んだことで、食糧・栄養の安全保障に関心を持つようになった。以来、ブリティッシュコロンビア大学への交換留学生として食糧政策を学び、カナダにおいてこの研究分野の登竜門である「Farm Credit Canada Business Award」の最優秀賞を受賞。その後、米カリフォルニア大学デービス校およびメキシコ国立大学で食料と栄養についてのさらなる研究に励んできた。

2012年ロンドンオリンピックで、英キャメロン首相とブラジルの副大統領が栄養分野の取り組み強化について合意を示したことをきっかけに、翌2013年に英国とブラジルは「成長のための栄養」という会議を開催した。2014年に安倍総理が英国を訪問した際、英国とブラジルが始めた栄養の国際的対策強化を日本がフォローアップするという内容の共同文書に盛り込むように外務省を主導し、英国及びブラジルの外交担当者と交渉して案文をまとめた。その功績は非常に大きく、2020年東京オリンピックの開催年に「栄養に関する国際会議」の日本誘致を目指している。

現在は在ジュネーブ日本政府国際機関代表部にて、開発と貿易担当の専門調査員として活躍しており、今後の日本における国際保健政策の推進が期待される。

慶應義塾大学経済学部卒
 米カリフォルニア大学デービス校修士課程修了

看護・保健部門: ^{えもと しゅん}江本 駿 東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻家族看護学分野
 (国内) 東京大学リーディング大学院 GCL プログラム 博士課程 1年
推薦者: 栗原 正利 公益財団法人日産厚生会医学研究所 玉川病院気胸研究センター長



江本駿氏は、幼少のころに発症した周期性ACTH症候群（現周期性嘔吐症候群）という稀少難病の経験をもとに、一貫して患者が抱える問題に向き合う活動をしてきた。

日本に数百名ほどしかいないといわれるこの稀少難病は、患者数が極めて少ないことから病気と向き合うことが難しく、闘病生活は先行きが見えず不安なものである中、学部生時代に、類縁疾患を含めて自らが抱える病気の家族会を立ち上げた。病気に悩む人々の医療相談や病院紹介を行うほか、海外の患者団体や専門医と連携し、患者体験を共有することで患者とその家族に寄り添うだけでなく、病態の解明に向けて精力的に活動を続けている。また周期性ACTH症候群（現周期性嘔吐症候群）の患者の多くが子どもであるということから、患者本人はもとより、就学、進学、就職などに悩む親の立場にも手を差し伸べており、病気の理解促進に大いに貢献してきた。

また自らの経験を活かし、難病・慢性疾患全国フォーラムにおいて最年少の実行委員を務めている。様々な患者団体の代表で構成されるこの実行委員会は、政府の難病対策への働きかけに影響するだけでなく、若い世代の稀少難病に対する認知向上にも貢献している。医療関係者や医療学生に講演・対話をセッティングしているNPO法人患者スピーカーバンクでは、自らの稀少難病の闘病経験をもとにスピーカーとして参加している。またNPO法人ASridでは疾患データを収集・解析し稀少疾患のエビデンス収集に尽力している。

自らの経験を活かすことで、広報活動が難しい稀少疾患患者にスポットを当て、今後も患者主導型の活動を継続することが期待される。

東京大学医学部健康総合科学科卒
 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了



Symbols of Tomorrow

看護・保健部門: 菊地 陽 特定非営利活動法人 地球のステージ プロジェクトマネージャー
(国際) 保健師・助産師・看護師

推薦者: 今野 良 自治医科大学附属さいたま医療センター教授



菊地陽氏は学生時代より僻地医療に関心を持ち、途上国の医療改善を志して継続した支援活動を行っている。貧困・文化・政治的問題が絡み合う発展途上国の課題を強く認識し、2011年に青年海外協力隊の一員としてインドネシアに派遣され、助産師の立場で拠点病院や保健所の業務及び母子保健の啓発改善に従事した。二年間の任期を満了して帰国した後、自治医科大学看護学部にて日本型地域ケア実践開発研究に携わり、僻地医療と一般医療における教育研修体制についてより一層意識を高めた。2014年から現在に至るまで、特定非営利活動法人地球のステージの一員として、東ティモールにて保健政策に尽力している。東ティモールは2008年より包括的地域保健サービスを国の政策としているが、円滑に進んでいないという背景がある。地域の保健局と協同し、住民代表、保健センター職員を巻き込んで問題を視覚化し、村にある全戸を訪問しながら住民自らによる健康づくりを目指した。その結果、現在の活動地域であるハリトア郡の保健政策実施率は、一年半で0%から97%に飛躍的アップを遂げた。医療従事者に対する卒後教育システムの整っていない東ティモールで、研修などのサポート体制づくりに貢献した。

日本での熱心な僻地医療研究と、助産師として積んだ経験に加え、周囲の人を巻き込む自身の魅力と人柄が成果に繋がったという。東ティモールの将来的な医療保険サービス拡充に向け、その基盤となるシステムを構築した功績は地道であるがゆえに非常に大きいものであり、今後の国際保健分野における専門家として一層の活躍が期待される。

自治医科大学看護学部卒

NGO・ボランティア部門: 陰山 亮子 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
ホンジュラス事業業務調整員

推薦者: 逢沢 一郎 衆議院議員
Michael Lindenbauer 国連難民高等弁務官 (UNHCR) 駐日事務所駐日代表



陰山亮子氏は、中央アメリカ中部に位置するホンジュラス共和国において、AMDA 社会開発機構が実施する母子保健事業に4年間従事してきた。地域密着型のコーディネーターとして、ホンジュラス山間部における地域の母子健康向上を目指し、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジの実践とシステム強化を支援する取り組みに貢献している。

在ホンジュラス事務所で、JICA草の根技術協力事業（母子健康向上）のコーディネーターとして2011年より活動を開始。また、外務省日本NGO連携無償資金協力の事業にも従事し、同国の農村地域エル・パライス県において、母子の健康向上のために、出産する妊婦のための宿泊施設「妊婦の家」を設立、安全に出産ができる環境づくりに貢献している。人口の約8割が山間部に集中するこの地では、それまで出産可能な施設が極端に少なく、移動に時間もかかるため施設での出産をあきらめる妊婦が多かった。リスクの多い出産により妊産婦や乳幼児の死亡率が高かったが、環境改善により施設での分娩件数は倍以上になったという。

またコミュニティ薬局の運営支援を行い、住民に手の届く価格で基礎医薬品を提供できるシステムを構築した。コミュニティ薬局の運営者として、また一定の診断を下せる人材として、現地の保健ボランティアを育成する過程でも中心的な役割を担ってきた。現在、コミュニティ薬局のサービス網は70以上の村に広がり、年間2万人が活用するまでに拡充された。

海外での活動を広く知ってもらうため、帰国時に現地での活動を紹介する講演を継続的に行っている。その反響は大きく、陰山氏をはじめ、NGOによる国際協力やボランティア活動において努力を積み重ねている若い力のさらなる原動力となることが期待される。

宇都宮大学教育学部生涯教育課程地域社会教育コース卒

以上